浮遊する塵

高橋光吉

蚊取香渦巻型の灰となり小さき部屋部屋にそれぞれ孤り

乳牛の仔を生むらんか羊水の出づるを見て秋風に立つ

寒あけの屋根越しの日は浮遊する塵もあかるくうつしてゐたり

商人をもつとも嫌ひしわれなるが敗戦と病とを機に古書を商ふ

幼子と竹箸もちて壺に入るる白茶けし骨がかすかに音す（長兄利吉の夫婦養子の娘と）

読みたき本除きおきしがまたも読めず書棚にわれは竝べき

ラジオ劇「死者の奢り」聞きしより解剖を厭う妻となりけり

安楽死認められなば選ぶべし苦しさに堪ふ妻の繰言

全盲の近きを識れる妻のため口にはせねど痛きほど金欲し

関はりのある人三百餘鬼籍に入ると妻たんたんと言ふ

老妻に魚の小骨を採りてやる互にかはす言葉はなくて

自らの顔見さること幾年ぞ呵呵大笑せり眼を病む妻は

闘士たりし君が形見の肌着つく若き筒袖の日を思ひつつ（延島英一君）

古き同志の宛名書きとくに少なくなりし来る年の賀状

上水道の採り入れの堰越えし洗剤の泡老醜のごと

権力の鬼となりし佐藤成田の民の地にしがみつく心を知るや

生れなば背番号をばつけるといふ政治の介入あゝ極まるか

交流／その質的深化を

——アナキズム系三誌による《全国交流会》報告と感想——

さる九月一五・一六の両日、静岡において、〈リベルテール〉〈アナキズム〉〈イオム〉三誌を中心とする交流会がひらかれ、われわれの〈イオム〉からも六名が参加した。

今日、アナキストあるいは反国家・絶対自由を志向する個人・グループが全国に散在しているが、たがいに意志や情報を交通させる機関および紙誌を、全国的にも地方的にも持たず、各地に孤立分散しているというのが現状である。もとよりわれわれが職場なり学園なりの生活原点にあくまで踏みとどまり、そこに変革への運動を堀りおこしていくのが、われわれの最も基本的な姿勢であろうが、同時に——われわれの運動の広がりと深化の為に——全国各地で独自の運動を展開している人々との情報交換・意志疎通をはかること、あるいは可能な範囲において共同行動をおしすすめていくこともまた、同時的に追求しなければならない事柄であろう。

ニュアンスの相違はあれ、ここ一～二年、以上のような意見が各地のグループ・個人から出されている。そのような状況をうけて具体化の第一歩として企画されたのが、この交流会であった。予備段階として、八月初旬のCIRAセミナー席上における話し合いの際、事務的な便宜を考慮して前述のアナキズム三誌の共催とすることが決められ、九月一五・一六日をむかえたのであった。こうして、一五日の午後から一六日の正午まで、さして広くない宿舎は関東・関西を中心に東海・長野の各地からあつまった仲間、友人によってうずめられた。

第一日目。まず三誌より各一名、計三名の司会者をえらんではじめられる。もっとも午後は遅れて到着する人々を待ちつつ、かなり刻明に個人・グループの現状報告をふくむ自己紹介に時間が費され、実質的な討論がはじまったのは夜に入ってからであった。

まず司会者より、全国的な交流のための最も端緒的な作業として、各地方（東京とか大阪）毎に全国のアナキズム系紙誌を集中配布する、そのような流通網の確立が提案された。

これ自体は、ごく初歩的な無駄をはぶくという意味でも、誰もがその必要性を認める事柄であろう。事実そうであった。ところが、I君の「これまでのアナ系出版物は採算を度外視した犠牲的なもので、これではダメだ。出版活動を継続していける程度に商業ペースに乗せる必要がある」という発言を口火として、その是非をめぐって、I君と数名の者との間で交される、えんえんたる議論となった。「目下の中心的な議題に議事を集中してほしい」という司会者の再三再四の注意にもかかわらず、議論は拡散し、数時間が費されたのであった。二ケタの人間が集まっている場において、特定の個人が当面の議題からはみ出す問題を全面展開し得ないのは当然だ。これは、目下の議題に発言を集中するという、会議における初歩的な姿勢が守れなかった結果であり、残念という他ない。事実同夜はこの消耗的な議論で終ったのであり、ダメだとしかいえないのであり、報告者は羞恥をおぼえつつ、それをここに記しておく。

第二日。前夜の轍を踏まぬため、全員が司会者に協力し、議題に集中する。

①諸グループ間の紙誌交換について。各グループ間で具体的にポストを設定し、相互交換していく。（これについては関西段階においては、交流会より一月半が過ぎた現在、数グループの相互連絡が確立しつつある）

②交流紙について。交流紙（情報紙）の問題は、今回の会合における、おそらくはもっとも大きな課題であった。「現在、全国的な運動がないのだから、全国交流紙の必要性は存在しない」という少数意見があったが、大部分はその必要を認めた。ただし誰が、いかなる形でそれを担うかについてまで決定するにはいたらなかった。「リベルテール」「リベーロ」という特定の紙誌を延長させる形でいくつかのプランはあったが（「交流会プログラム」参照）、新しい情報紙が旧来のグループ固有の色彩を帯びることへの危惧が出され、情報紙の問題は、諸グループ間でさらに継続的に検討することに落着いた。（この件についても状況の変化によって、一一月現在、京都から発行されている月刊「リベーロ」の紙面を一新し、全国的な情報紙としてすでに稼動をしはじめていることを中間報告的に発表しておきたい）

以上二つの討論ののち、自由連合・アナキストの組織はいかにあるべきかについて若干の意見が出された。これは、関西を中心に本交流会と並行して進められている、

全国的連合のための討論合宿とも関連しつつ発言されたものであった。残念ながら、その内容は省略しなければならない。紙数がつきたこと、ならびにアナキストの組織についての各人の論理とイメージを誤りなく伝えるのは至難であるからだ。ただし、この問題に関しては、交流会での各発言を踏まえつつさらに追求していくことをわが「イオム」よりの参加者として約束しておきたい。

今後も必要に応じて交流会をひらいていこうという申合わせを最後に、二日間にわたる交流会は終った。時間と費用をかけて各地から参集した割には収穫が少なかったとする見方もあるだろう。たしかに確たる方向性を見出し得なかったという点ではその通りである。（あるいは、このような交流会からは、〈方向性〉など出てこないということを、私たちは最終的に確認しなければならないのかもしれぬ。）しかし報告者は、本集会は即有効性を発揮するという性格のものではなく、これが呼び水となってさらに交流の輪が広がり、その内部から真に強固な連帯をつくり出していくものであると考える。そしてその成功は、われわれの主体的な努力にかかっているのである。

（一〇・三一／文責戸田）

（8頁より）

アルフレッドもみんな私につられたらしかった。やがて、広い大地の中の一本道をたどる小さいボンコツ車からコーラスが流れた。

歌声はラグーサの街に入るまで続いた。ラグーサは石だたみと坂の街だった。車はガタガタと車体を鳴らしながら走り、つるつるに磨きあげられたように光る石だたみの上を幾度か曲り、サン・フランセスコ通の狭い路上に停った。フランコが家から出てきて迎えた。一日会わなかっただけなのに、彼の顔を見るとなつかしかった。荷物をおろす間ももどかしそうにフランコは全員を近くの歯科医の門標をかかげた家へ案内した。ここのドクターは親日家で、我々の着くのを待ちかねていたのだという。雑談の一ときをすごすと、ボナンノ夫妻はカターニャにもどることになった。二人と別れる時、サヨナラといって手を差出そうとした時急に熱いものがこみあげ私は戸迷って今出てきた歯科医の戸口の蔭に隠れた。メリナが追ってきて私を優しく抱き囁いた「もう終りじゃないわ。今度は私達があなたを訪ねて日本へ行くわ」。私は涙をふいて彼の前に進んだ。私を見下す優しい目差がうるんでいた。黙って握手をし互いに手をふりながら車は遠ざかっていった。

（つづく）

「平民大学講演会」について

運動史の原点再見……

河本乾次

一

私は本誌に、運動史のタイム・カプセルを掘り起し、その中から、散見的な再見雑文を書きつづけた。今日の時点から過去をふりかえってみることは、何か古くさく感じられるが、歴史というものは、そんなにカビくさい化石であろうか。歴史をどのように見るかの史眼によって、その価値に軽重が生じる。過去を現代・将来へ、どうつながりをもつか、受け取り方の思考に、今日的意義から読むか読まないかの問題意識が肝要である。そこで私のものは、むづかしい用語で粉飾した歴史理論ではなく、当時発生した情況そのままの素朴な生の報告に過ぎない。この報告が、報告、報告、と累積することによって「運動史」が生れるのである。しかし私の報告は不十分なものである。そこで拙文の目的は一つの誘い水であって、当時の関係者から御叱正の助言を頂戴してより正確な報告の完成にあるのである。

さて大正期の社会運動は複雑多彩である。大正デモクラシーの激流の中に発展し、まして大正八年前後といえば、日本のデモクラシーの開花期であった。ソ聯の革命による社会主義思想が息を吹き返し、米騒動による民衆の直接行動の影響は労働運動の擡頭を早めた。この二面の路線である社会主義と労働運動が結びついたのが大正八年期の特徴であった。この運動足跡を知るに、大杉栄の『労働運動』紙の発刊、「北風会」「労働問題研究会」の集会、平民大学講演会、日本社会主義同盟創立準備会の活動など挙げることが出来る。ここではその中の一つ、「平民大学講演会」を取り上げることにした。

平民大学講演会といえば、今では多少は知っている人もあろうがこれが果した役割となると知る人は少いのではなかろうか。この講演会が、日本社会主義同盟創立の醸成というべき機運・情勢をつくったといえるのである。ここでは、そういう客観情勢までの詳細な記述は紙数の関係で無理なので、読者の自由な研究課題として残しておき、講演会のみを素描的に紹介してみよう。

二

山崎今朝彌企画の平民大学講演会は、当時、宣伝用に配付されたハガキ型のビラには、左のプログラムが記されていた。

平民大学　各大臣
御招待　学術講演会々則

会員　日本語を解する老若男女
期間　八月八日より十四日迄一週間
会費　一晩金参拾銭　但釣銭なし
時間　毎晩五時半開場　六時半始講約四時間
場所　芝区兼房町十一　寄席玉の井内平民大学仮講堂
（桜田本郷町下車約半町）
日割、講師、演題
八日　金　堺　利彦　日本社会主義史
大庭　柯公　ロシヤの民衆心理
九日　土　川島清治郎　軍国主義の理論
高畠　素之　マルクス学総批評
十日　日　西川光二郎　日本労働運動史
室伏　高信　社会民主々義批判
一一日　月　荒畑　寒村　産業的自由の意義
生田　長江　ニイチエの社会観
一二日　火　与謝野　寛　落首文学評論
大杉　栄　社会改造の哲学
一三日　水　山口　孤剣　維新史経済的説明
宮武　外骨　江戸時代の階級思想と穢多
一四日　木　山川　均　労働運動の社会的価値
馬場　孤蝶　詩人ウイリアム・モリス

東京市芝区新桜田町十九番地　平民大学
（振替東京三一三七〇番、電話新橋三〇七七番）

講演会場は、寄席玉の井に予定されていたが、実際に開催されたのは芝区三田四国町のユニテリアン派の教会「統一教会」であった。平民大学の創立年月日は不明であるが、山崎が学長で、岩佐作太郎が理事であったので会場内の整理や世話に、講師紹介の司会などに岩佐の活躍はめざましく、このことは運動史の中ではかくれた縁の下の力持ちであった。

そこで、この講演会の模様を岩佐の書き残した中から拾い挙げることにする。昭和九年四月一日発行の『自由聯合』（第十五号・大阪発行）に載った岩佐執筆の「我等の運動史の片鱗――私の思い出――」の中の一節には左のように記述されている。

「平民大学の学術講演会は何時開催されたかと言うと、それは大正八年八月八日から十四日まで一週間、毎晩六時半から約四時間の予定で、芝区三田の統一教会、当今の労働総同盟本部の講堂を仮講堂として開催された。講師、演題及びその日割は左の通りであった。

八　日　日本社会運動史　堺利彦、ロシヤの民衆心理　大庭柯公
九　日　軍国主義の理論　川島清次郎、マルクス学総批評　高畠素之
十　日　ニイチエの社会観　生田長江、英国の労働的団結禁止法とその精神　荒畑寒村
十一日　落首文学評論　与謝野寛、社会改造の哲学　大杉栄
十二日　維新史経済的説明　山口孤剣、江戸時代の階級思想と穢多　宮武外骨
十三日　労働運動の社会的価値　山川均、詩人ウイリアムモリス　馬場孤蝶
十四日　日本労働運動史　西川光二郎、社会民主主義批判　室伏高信

この登場人物の中大杉君はその筋のなにかのため白柳秀湖君が出ることになった。この講演会において特筆すべきことは、この聴講者の大部分が地方から出て来たこと、遠くは沖縄、北海道から出て来た人々があった。

そして、この講演会は、その登場人物が如何にも多方面の人々を集めていることは、その演じた役割に見ても分るように、軍国主義者あり、国家社会主義者、無政府主義者、社会主義者、その他民主主義者等々があり、中には社会運動から一度隠退したものもあった。それは到底一堂に集め得られようとは思われない、それが集られている。

こうしたことは、山崎君でなくては企てようとも企てられないことで、これに山崎君の特色が発揮されている。そしてこれが、後日種々雑多な異分子を集めた『日本社会主義同盟』の出現を予示するものと言われるだろう。かように一堂に集め得ようとも思われない、集められようと思われても集めようと何人にも企だてられない企てをした山崎君の明智は、集められ得る、こうした日本における空気を見てとっての企てであった。」

三

岩佐の記述で講演会の状況は大体に知ることができた。そこで、蛇足の感あれど、私は当時を回想して、大半は忘却しているおぼろげな記憶を辿ってみることにした。

八月八日、講演会の初日は、私は何かの事情で欠席している。八月九日、川島清治郎の「軍国主義の理論」は社会主義とは反対の国家主義の立場からの軍国主義理論

で、実に皮肉にも、その愚論であるかを知らしめるに有効であった。高畠素之の「マルクス学総批評」は経済学的な専門用語が多くて、とても話が難解であった。八月十日は休講した。当日は日曜日、会場が教会なので祈禱、説教のために使用できなかったのではなかろうか。八月十一日、荒畑寒村の「英国の労働的団結禁止法とその精神」は題名が堅苦しいせいか、それとも臨監の警官からの「中止」を避けるためか、いつもの寒村に似合わない平凡な話に終った。生田長江の「ニイチエの社会観」は、哲学的な静かな聴講に終った。八月十二日は、与謝野寛の「落首文学評論」、予定の大杉栄の話は延期になった。大杉に替って白柳秀湖が「武器の変遷」の話をした。八月十三日、山口孤剣の「維新史経済的説明」は、数分にして臨監の三田署長から「中止」となった。次の宮武外骨の「江戸時代の階級思想と穢多」も、「大島中将も穢多である」と開口一言で直ぐ中止となった。聴講者の中から「大島中将が穢多であるという事実をどうして否定するのか」と署長に詰め寄り、「この巡査上り」と罵声怒号にたまり兼て「解散を命ず」となった。遂に警官と小競合いしながら聴講者は会場外に押し出されたが、帰る者なく教会の前に立ちつくした。この聴講者を前にして、教会の講師控え室の窓から岩佐作太郎は、警察の言論に対する無法な弾圧に抗議の弁をじゅんじゅんと説いて拍手が沸いた。警官も、岩佐が演説口調でなく、静かに会話口調でしゃべっているので、会話まで注意、中止することはできず、地団駄を踏んだ。こういう場面での演技は岩佐の得意とするところで、当夜講師からの講演は中止で聴けなかった聴講者はその替りに岩佐から、無政府主義の話を聴くことができて、満足して解散した。八月十四日は、山川均の「労働運動の社会的価値」、この話も数分で中止となった。この時山川は悠然としてコップの水を飲んだ。臨監の警官は講演をつづけられると思って再び「中止」と叫んだ。山川は神経質の顔をゆがめて、「水を飲むことが中止か？」警官に痰をひっかけるように浴せかけて降壇した。馬場孤蝶の「詩人ウイリアムモリス」も注意注意の連発で、よほど癇に触ったとみえ、文士肌の温和な馬場も、長髪の頭の毛をムシャムシャと手でかきむしりながら病気上りに似合わない大声で、「文芸家は、危険思想を温順にするのが我々の任務である」と警官に皮肉の言葉を投げた。八月十五日、今夜で講演会は最終である。西川光二郎の「日本労働運動史」も数分で中止となった。次に室伏高信が、「私は社

会民主主義者であります」と開口一番が終るか終らぬうちに中止となった。

聴講者は総立ちとなって臨監の警官に抗議した。山崎今朝彌は憮然として連日の弾圧に、「この弾圧に、私が社会地位から落ちるか、三田署長を免職さすか闘ってみせます」と叫んだため署長は怒って山崎を検束せんと警官の一隊が山崎に襲いかゝってきたので、聴講者はそれを阻止すべく警官と乱闘となった。それから一同は会場外に出て、徒歩で芝新桜田町の山崎の自宅、平民大学に引き上げた。ここでは所轄警察が違うので、警官を動員するまで時間がかかる、この間に室伏高信の話を終了するまで無事聴くことができた。しかし散会となって山崎の自宅を出た時、街路には多数の制服、私服の警官でものものしくとりかこまれていた。当夜の聴講者全部に、その身元を確認するため二名づつの尾行がつけられたのであった。

翌日の八月十六日は、延期されていた大杉栄の講演が、山崎の自宅、平民大学で催されることになっていた。それを当局の眼をくらまして、会場の変更は聴講者に巧みに連絡され日比谷の服部洋服店の三階で、大杉の「労働運動の哲学」の講演を無事に催したのであった。この平民大学講演会の圧巻は何といっても大杉栄の講演である。聴講者も大きな期待を懐いて当日を待った。しかし警察の弾圧方針からみて、大杉の講演を聴くことは不可能であった。それを主催者側の苦心の努力によって、ひそかに会場変更の戦術をとり、また大杉も尾行をうまくマイて所在をくらましておいて会場に出席し、無事に大杉の話を心ゆくまで聴くことができたのは、主催者側だけの機略のみでできるものでなく、これに聴講者も応ずる協力がなくては成功しない。聴講者に、会場の変更の伝令、案内役を警察に知れないように活躍したのは、当時の「北風会」系の無名の労働者であったことを忘れてはならぬ。

四

ここで前記の粗雑な報告の欠点を補う意味で、森長英三郎著『山崎今朝彌』（紀伊国屋新書）の百二十七頁の一節を借用することにする。

〈平民大学は、大正八年八月、夏期講習会を開いて有名になってきた。「規則」によると、「目的、社会改造の闘将戦士養成」などと書いている。会場は三田、統一教会である。

講師のなかには社会主義者でない人も含んでいる。『新社会』（大正八年五月号）の「社会主義夏期講習会」予告によると、明治四〇年八月、直接行動派の幸徳秋水から議会政策派の片山潜、田添鉄二らが講師となって両派合同の夏期講習会を開いたのを『新社会』主催で再現しようとしたことがあるが、これを平民大学主催でやることにしたのであろう。山崎は所轄三田警察署長山川季好と交渉の結果、聴講者一〇〇人に制限すること、警察へ聴講券一〇枚を無料進呈すること、警察官が山崎の書生を仮装して来会者の氏名を書きとること、警察が速記をとり山崎に渡すこと、山崎は講師が過激にわたらないよう、聴衆が喧騒せざるように責任をもつこと、警察も不当な中止、解散を命じないことの「屈辱的紳士契約」をした。ところが三日目まではことなくすんだが、四日目からは解散命令こそなかったが、臨監席の警察官から弁士中止の連続であって、山川は開口と同時に中止、室伏は登壇してコップの水を呑んだだけで中止である。山崎は聴講者にたいして、署長は山崎との紳士契約を破毀したから、山崎が死すか署長が左遷になるか、後日、法律によって徹底的に戦かうから、今日の所は騒がないで、山崎の自宅まで引きあげてくれと、いい終らぬうちに、署長は「此ッ野郎」と怒鳴って山崎につかみかかってきたが、聴講者の波が署長の方へ押しよせたので、署長は逃げた。山崎はこの日のことを予測して自宅を第二会場とするように用意しておいた。山崎の自宅は別の愛宕警察署の所轄である。山崎宅で室伏は流れてきた聴講者に講演をつづけ、山崎はそとで見張りをした。しばらくたって、愛宕警察署長が部下を引率して急いでくるのを見かけたので、山崎は室内に通報して自発的に解散させてことなきをえた。つぎの大杉栄の講演は翌日、別の日比谷警察署管内の有楽町で、臨監なしにやってしまった〉

右に引用した森長氏の一文、〈平民大学は、大正八年八月、夏期講習会云々〉の「夏期講習会」は平民大学講演会も夏期講習会の一つの催しであるが、翌大正九年八月に、前年の講演会とはいささか趣向をかえて、夏期講習会の名で催されているので、当時予告されたものをここに転載することにした。

平民大学夏期講習会規則

△目的　社会改造の闘将戦士養成
△科目　各種学術研究と宣伝応用の実習
△方法　訪問見学　諸会合野外講演傍聴　珍書禁書研究　其他以心伝心口伝口授
△日時　八月九日（大正九年）より二週間
　　昼間及夜間
△講師　大勢
△学費　一回半円　全期五円
△特典　男女同権　甲種危険人物の登録
　　社会学士の公認　寄贈書の分配
△寄宿　一日一円　場所芝区新桜田町十九

この夏期講習会は、平民大学の事務所である山崎今朝彌宅で、帝大の新人会の活動者を迎えて話を聴いたり、早大の建設者同盟、暁民会など訪問し、そこの集会の模様を見学すると共に、早大の教授北沢新治郎の「ギルド社会主義」　早大講師の植田好太郎の「ブルードンの財産論」「革命的センチカリズム」などの話を聴いた。これらの見学、講演は無事に終ったことなく、いつも警官に踏み込まれて「中止」「解散」で警官隊と衝突をくり返した。暁民会見学のときには、講師植田好太郎が淀橋警察署に検束されたので、聴講者一同は警察署に押しかけ抗議、釈放を要求するなど、学習だけでなく、実践活動の実習を行ったのである。この講習会は聴講者側だけの学習でなく、訪問を受けた新人会、建設者同盟のインテリ学生と革命的労働者の接触、交流が機縁となって、新人会、建設者同盟の中から続々と労働運動、農民運動の中へ飛び込んでくることになった。

この講習会の聴講者の群の中に、必ず岩佐作太郎の姿は見られた。岩佐は、大学教授の北沢、講師の植田の学問的な話をば労働者にも判り易く、またアナキズムの立場からの平易な言葉で説明につとめたのであった。

この講習会の時点においてかくれた面を掘り起してみると、建設者同盟訪問のとき、聴講者の或る一員に、同盟同人の古田大次郎が語った言葉は、「私はまだ学生の身分なので、北風会などの集会には出席できませんが、熱心な聴講者に接して反省させられます」と、このときの古田は謙遜的で、運動には消極的態度であった。それが数ヶ月後には急変し、建設者同盟から脱皮して、中浜鉄とギロチン社を組織することになる。この古田の飛躍行動の原因は、講習会における革命的労働者との接触によるものかどうかは、今後の研究課題として残しておこう。

（おわり）